

SESSION 2016

**AGRÉGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P. (A)

1) Traduire en français le texte ci-après (extrait de 橋本健二『階級都市 — 格差が町を侵食する』ちくま新書 2011 年)

2) Faire l'analyse logique, sous la forme de schémas détaillés en français, des phrases suivantes :

「しかし今日では、多くの統計や調査研究が蓄積され、経済的な格差が拡大しているという事実は誰も否定することのできないものとなっている。

しかし格差拡大が、単に抽象的な経済指標や、学術的な調査研究によってしかとらえられないものならば、これほどまでに人々の注目を集めることはなかっただろう。注目が集まったのは、格差が拡大しているという事実や、それがもたらしたさまざまな変化が、身近なところで感じ取られるようになったからである。」

格差拡大の風景

↑都市に目撃される格差

二〇〇〇年代の幕開けの一〇年は、格差が注目を集めた時代だった。その最初の段階では、「日本人は九割が中流だ」「日本は格差の小さい社会だ」という思い込みがまだまだ強く、格差拡大が事実かどうかをめぐる激しい論争も展開された。しかし今日では、多くの統計や調査研究が蓄積され、経済的な格差が拡大しているという事実は誰も否定することのできないものとなっている。

しかし格差拡大が、単に抽象的な経済指標や、学術的な調査研究によってしかとらえられないものならば、これほどまでに人々の注目を集めることはなかっただろう。注目が集まったのは、格差が拡大しているという事実や、それがもたらしたさまざまな変化が、身近なところで感じ取られるようになったからである。

会社の業績悪化で職を失った元会社員、就職が決まらずにアルバイトを続けている若者、ローンが払えなくなり自宅を手放した家族、地下鉄の駅の片隅に寝転がっているホームレス、客が来なくなった店をたたんで細々と生活している老夫婦など。いずれも、最近の日本ではごくありふれた人々の姿である。私たちは日々、格差拡大の事実を目撃しているのである。

それだけではない。たとえ生身の人々の姿を目にしなくても、変化はみてとることができる。なぜなら格差拡大は、都市景観までも大きく変えてしまったからである。格差が拡大する前後では、街の風景が変わった。この目にみえる変化が、人々に格差拡大を実感させるようになった大きな原因のひとつだったことは間違いない。

変化のなかでもいちばんはっきりしているのは、小さな木造住宅と町工場が混在する、昔ながらの下町風景が多くの地域から消えてしまったことである。

↑リアルな下町の消滅

東京は一九六〇年代まで、日本最大の工業都市だった。ほぼ全体が住宅地になっている杉並区、世田谷区など西部地域を除き、金属加工や機械工業、日用品を作る軽工業などの工場が、南部、北部、東部と都心を取り囲むように分布していた。その大部分は従業員が数十人以下の零細工場で、周囲には工場勤めの人々が住む木賃アパートや小さな木造低層住宅、これらの人々を相手とする商店などが入り混じり、住商工混在地区を形成していた。木造家屋がどこまでも続き、そのところどころから上に向かって伸びる煙突が煙を出すという、東京の下町の典型的な景観が、こうして形成されていた。

ところが一九九〇年ごろから、都心に近い地域を中心に、下町の景観が大きく変わっていく。

日中はたえず機械の動く音が聞こえ、人や車の出入りも多かった工場が、ある日から動きを止める。まもなく建物の取り壊しが始まり、あっという間に更地となる。そこに建設予定の立て看板が立ち、工事が始まったかと思うと、マンション販売の大きな看板が掲げられる。それまで低層の建物ばかりだった街に、高く鉄骨が組み上げられ、中高層のマンションが完成する。入居するのは、私鉄や地下鉄で都心へ通うサラリーマン家庭が中心だ。こんな変化があらちらに起こり、街はその外観を大きく変えていく。

こうして下町は、以前に比べて複雑な階級構成を示すようになる。もともと下町に住んでいたのは、零細企業の経営者と、そこに勤めるブルーカラー労働者、そして自営業者だった。少なくとも高度経済成長期まで、零細企業に勤めるブルーカラー労働者のかなりの部分が、後には自分の工場や店をもって独立するという社会移動のルートをたどった。職と住が近接していて、生活が狭い地域社会で完結しているという点も共通だった。したがって下町の住民たちには、事業主と労働者という違いと同時に、生活世界の上での共通点があったといつてよい。

ここに都心の大企業に勤めるホワイトカラーの新中間階級が、マンション住民として入りこむ。これまで東京の新中間階級の典型的な住宅といえば、通勤に一時間以上もかかるような、郊外の戸建て住宅だった。ところが格差拡大のなかで、長時間労働のかわりに高所得を得るようになった新中間階級の一部は、都心志向を強め、都心またはその周辺でのマンション暮らしを好むようになったのである。

彼ら・彼女らの生活は、それまでの下町住民とは異質である。毎朝、都心の職場へと出勤し、夜になると帰ってくる。地域社会のもつ意味は、生活に占める重要性においても、そこで過ごす時間の上でも、限定されることになる。しかも住んでいるのは閉鎖性の高い中高層マンションの住戸である。当然、地域社会の問題には無関心になりがちだ。

こうして下町に住む人々は、古くからの住民と新しい住民という二つの集群に分断されることになる。前者は経営者から労働者までを含むが、経営者といっても町工場の主や商店主であり、職住一致または近接の生活を送っている。後者は都心に勤める新中間階級で、単に都心に近いという利便性と、快適な住戸を求めて住みついたにすぎない。二つの集群の関係は、古い低層の木造住宅群と、そこから空に向って突き抜けた鉄筋造りのマンションという空間構成に、はっきり示されている。つまり街の景観そのものが、階級構成を表現しているのである。